

第一日曜日
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～
その他の日曜日
教会学校 9:00～
聖書を読む会 9:00～
主日礼拝 10:30～

日本基督教団 麻布南部坂教会月報

2021 (令和3年) 1. 10

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

祈祷会
第2日曜日 礼拝後
成人会
第3日曜日 礼拝後
婦人会
第4日曜日 礼拝後
教会附属 南部坂幼稚園

「弱いときにこそ強い」

牧師 松谷 祐二

コリントの信徒への手紙二 第二五章五節b、 一〇節

しかし、自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません。仮にわたしが誇る気になったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはならないでしょう。だが、誇るまい。わたしのことを見たり、わたしから話を聞いたりする以上に、わたしを過大評価する人がいるかもしれないし、また、あの啓示された事があるかもしれないからです。それで、そのために思い上がることはないようにと、わたしの身に一つのとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。この使いのついて、離れ去らせてくださるよう、わたしは三度主に願いました。すると主は、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」と言われました。だから、キリストの力がわたしの内に宿るよう、むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。それゆえ、わたしは弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態にあっても、キリストのために満足しています。なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

(新共同訳聖書)

「コリントの信徒への手紙」は、使徒パウロが著しました。「使徒」とは、イエス様の昇天後、キリスト教会の土台作りをした最初の指導者たち十二人のほか、復活のイエス様を証言でき、その教えを受け継いでいると認められた一部の弟子たちも「使徒」と呼ばれました。

パウロは、元はキリスト教の迫害者だったのに、復活のイエス様の声を聞き、百八十度の方向転換

をし、キリスト教伝道者になったという、異色の経歴を持つ人です。そのせいでしょうか、パウロの「使徒」としての権威、つまり、パウロの教えは、イエス様の教えを正しく継承したものだ、というところに、疑いを抱く人々も少なくありませんでした。

パウロの死後も、彼の手紙の多くが書写され保存され、諸教会で繰り返し読まれ、今では聖書の一部になっていくわけですから、最終的にはパウロが「使徒」として認められていったことは確かです。しかし、パウロ自身、その生前には、しばしばその使徒性に疑いをさしはさまれ、「手紙は重々しく力強いが、実際に会ってみると弱々しい人で、話もつまらない」といった中傷も受けました。

指導者として人々に支持されたければ、普通は「弱々しい」という面を見せないようにするものです。ギリシャの文化では雄弁さ、演説やレトリックの巧みさが高く評価されましたから、「話もつまらない」と烙印を押されるのは、指導者として致命的なことでした。

ところがパウロは、「弱々しい人だ」との批判に答えて、「自分自身については、弱さ以外には誇るつもりはありません」と言い切ります。「弱さを誇る」？ 弱さの何が良いのでしょうか。自己アピールをするなら、もっとましな材料はないのでしょうか。

材料ならありました。出自や学歴の良さのほか、イエス様からの特別な啓示を受けたことも自慢できたはずですが、現代なら「啓示」と聞いても怪しむ人のほうが多いかもしれません。パウロの時代では十分に人々の興味を引く材料になり得ました。パウロは、受けた啓示について「仮にわたしが誇る気になったとしても、真実を語るのだから、愚か者にはならないでしょう」と、自信ありげです。

しかしパウロは、すぐに続けます、「だが、誇るまい」と。自分がイエス様から受けた啓示は本当にすばらしかった。だが、それを材料にして、人から過大評価されることも、自分が思い上がるのも良くないことだと。「それで、そのために思い上がることはないようにと、わたしの身に一つ

のとげが与えられました。それは、思い上がらないように、わたしを痛めつけるために、サタンから送られた使いです。」

パウロは、すばらしい啓示の話よりも、自分の身に受けた「とげ」の話をします。「とげ」とは、パウロが持つていた何らかの病気や障害でしょうか。それとも、仲間であるはずの教会の人々から疑いの目を向けられ、中傷されたことをそう表現したのでしょうか。いずれにしても、彼が「弱さ」を思い知らされずにはいられないような、「弱さ、侮辱、窮乏、迫害、そして行き詰まりの状態」と表現し、「サタンから送られた使い」と呼ぶほかないような、そういう事態が起こっていたのです。そして、この「使い」を離れ去らせてください、と三度イエス様に祈り願っても叶えられなかった。パウロの祈りへのイエス様の答えは、「わたしの恵みはあなたに十分である。力は弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」でした。そしてパウロは、キリストのこの答えで満足しました。「わたしは弱いときにこそ強い」と。

これらの言葉は、意味を取り違えないように注意する必要があります。ざりざりまで自分を追い込み一発逆転、窮鼠猫を噛む、といった意味ではありません。「わたしの(イエス様の、即ち神様の)力は、あなたの弱さの中でこそ十分に発揮されるのだ」。「わたし(パウロ)は弱いときにこそ、わたしのうちに宿ってくださるキリストの力が強い」という意味です。

人間の力が頼みとされているところでは、神の力、キリストの力は見えてきません。神は、わたしたちすべての者を救済し得る大いなる力を、十字架の上で死なれたキリストを通して、死者の中から復活されたキリストを通して、発動されました。そこでは人間の力は、何の貢献もできないどころか、キリストを死に追いやるため、死に閉じ込めておくために振るわれていました。しかし、神の力、キリストの力はその中でこそ、わたしたちを救うために発揮されていたのです。キリストの力、キリストの強さの現れ方は、わたしたちの期待とは異なり、わたしたちの思いをはるかに超えて大きいのです。

真夜中のアーメン

柴田 真由子

緊急事態宣言真っ只中の昨年四月から約二ヶ月半、熱と下痢と胸痛や頰脈の発作で寝たきり状態でした。PCR検査は陰性でその他の検査でも病気は見つかりませんでした。経験したことのない苦しさでしたが、かかりつけ医の先生があらゆる薬を試し、できる治療は全部やるという診察をしてくださったこともあり、現在は完全に回復し元気になりました。

五月初めに一時的に症状が落ち着いて、松谷牧師に近況をメールで報告し最後にこう書いていました。「恐れるなどあっても怖いものだとは思いましたが、今回もまたイエスさまに文字通り傷のあるお身体を差し出していただき、文字通り助け出してくださいだと思っております。イエスさまは本当にすばらしいお方です。」この後、病状が悪化してさらに耐える期間となりました。しかし、早い段階で何か確信があったのだなと思ひ出しました。

このメールの表現の根拠は、さらに遡って四月の病気の始まり、呼吸が苦しくて横になることが出来ず椅子に座ったまま凌いでいた時の記憶です。「イエスさま、これは今すぐに助けていただかないと、もうもちません。」平時でなく、緊急を要する祈りです。深夜でしたが、かかりつけ医の先生が電話で様子を聞いてくださりながら何回か種類を変えてお薬を出してくださいました。うつらうつら、祈りながらイエスさまとお話していた気がします。「罪と死の

鎖みたいですよ。命を奪おうとする力があって、こんなに恐ろしいとは初めて分かりました。これは絶対にイエスさまにしか解けません。私はどうしてもあなたの平安が欲しいです。」イエスさまは傷のある美しいお身体を見せてくださり、傷をじっと見てみるとその先に、イエスさまが十字架にかかっているお姿がありました。合点がいった瞬間に、私の全身にあった重い鎖が砕け落ちました。

「あなた、そんなに冷静に説明できるならコロナじゃないと思うわ。」と電話でお医者さんが言っていました。熱があつて対面の診察や検査は進まず、持病の担当医の先生との相談や発熱外来とPCR検査への紹介も一番混んでいた時期で、休診日や早朝深夜にも大変お手間をおかけしてしまいました。常に恐れはありましたが、イエスさまから受け取った真実が放つ偉大な強さが、私を抱えていてくださいました。発作で三時間以上は眠れず身動きが取れなかったで、常に手の届くところに聖書を置いて読んでいました。イエスさまに駆け寄った人たちは、イエスさましかいないのだと渴きに突き動かされました。イエスさまのお答えは、現在のこの私にも全く変わらないものでした。

結果、経験したことのない満たされた気持ち、何という恵みだろうと心底思っている特別な日々でした。今は完全に治ったからそう言えるのかもしれませんが、身体は誰が見ても苦しんでいたあの時にこそ、特別な恵みをいただいていたと感じるので状況とは無関係の霊的な感想なのだと思います。イエスさまがすぐそばにずっとおられたということだと思います。過去の

記憶も俯瞰で掘り下げながらイエスさまに胸の内を吐露していました。そうしているうちに、主は全ての苦しみを忘れさせてくださいました。目を閉じてこの日々を思う度、言葉になりません。両手を挙げてイエスさまを礼拝します。するとまた特別な強さがこの身体にみなぎります。イエスさまは本当にすばらしいお方です。

報告

* 南部坂幼稚園では、十二月二十一日(月)二十三日(水)にかけて、参加の保護者を学年別に分けてクリスマス礼拝を行い、二学期が終了となりました。

* 教会・幼稚園、それぞれの入り口に、防犯カメラが設置されました。
* 西南支区の新年礼拝が、左記の要領でオンラインで行われました。
日時：二〇二一年一月一日(金) 午後二時

説教題：「こう祈りなさい」

説教：生原美典(西南支区長・松原教会 会牧師)

* 各献金(月定献金・特別献金、東京神学大学後援会献金、隠退教師を支える運動、神学生を支える献金、会堂建築献金)へのご協力を、引き続き宜しくお願ひします。

《各部報告 十二月度》

成人会

日時 十二月二十日 主日礼拝後

場所 教会堂会議室
出席者 六名
開会祈祷 菊池才知子姉
内容

聖書研究…「出エジプト記」二十～二十三章
モーセとアロンはシナイ山に上り、イスラエルの神と民との契約の書「十戒」を告げられる。神への畏れ、恐怖でなく畏敬の念を持たせるため、恐れる人々を鎮め、モーセは仲保者として神との契約の内容、祭壇についてのほか、「十戒」に大前提を置き、公平さを重視した当時の社会生活についての諸規則を細かく語っている。これらに違反した場合の警告も語られる。主は約束の地に民を導く。み使いがイスラエルの民を異教の神々を崇拜する諸部族に導くとき、主は彼らを絶滅させる。ただし一年間は約束の地の保全のため異教徒を放置する。
次回 一月十七日
「出エジプト記」二十四～三十一章
担当 ヤング肇子神学生
閉会祈祷 黙祷

婦人会

休会

